

## 日本初の「カレッジリンク型シニア住宅」創設に向けて

2006年6月26日

関西大学文学部長 芝井 敬司

このたび、学校法人関西大学の文学部は、財団法人社会開発研究センターと連携して、株式会社アンクラージュが神戸市の御影山手（神戸市灘区土山町）に建設中のシニア住宅（高齢者施設）「アンクラージュ御影」の入居者を対象に、施設の入居後に、関西大学で科目等履修生・聴講生・社会人学生として学ぶ「オンキャンパス・プログラム」、シニア住宅で開講される「オンコミュニティ・プログラム」を提供することに合意し三者の間で覚書を結んだ。また、2006年秋から、関西大学の吹田市千里山キャンパスにおいて、アンクラージュ御影の入居予定者にたいして、シンポジウム、公開セミナーを開催し、2007年度には10程度の講座で構成される「プレコース」を開設する。大学と高齢者施設との協力で展開されるカレッジリンク型シニア住宅事業は、すでにアメリカで先行して始まっているが、日本で本格的に実施されるのはこれが初めてである。

2007年に始まる団塊の世代の大量退職時代を目前にして、少子化の進行の中で厳しい競争を迫られている日本の大学の将来を展望する時に、カレッジリンク型シニア施設の創設に最初に取り組むことは、日本社会に対する大きなメッセージであり、関西大学文学部としてもきわめてインパクトのある試みである。現在、日本社会は世界史的にも稀なほどに急速な高齢社会の到来を経験しつつあり、いわゆる老人ホームに代表される高齢者施設にたいする需要が増大するとともに、アクティブシニア層の生涯学習需要の高まりを背景に、知識をキーワードとする「生活のクオリティ」を重視する施設が望まれるようになってきている。その中で、最も将来性のある事業は、近年、アメリカにおいて注目されている大学の高等教育機能を組み込んだ「カレッジリンク型」のシニア住宅施設である。

アメリカにおける先行事例の示すところに従えば、こうしたカレッジリンクを持つシニア住宅の入居者は、他的高齢者施設と比べて総じて生活の満足度が高く、寝たきりになる割合も低く、老年期の生活の充実度が極めて高いとされている。十分な時間を生かして新しい知識を吸収することが日々の生活にリズムと張りを与えるとともに、若い大学生と触れあい学ぶことが、高齢者の生活を若く生き生きとしたものに保たせる。また、キャンパスにおいては、若い学生の相談役となって人生経験を生かせるなど、学生と高齢者の双方にとって利益がある試みである。こうした点で、今回の試みは、若い世代と隔離されがちなこれまでの日本の「老人ホーム」が持っている既存概念を、完璧に打ち崩すものとなる。

一方、日本の大学は、近年18歳人口の継続的な減少期を迎えて、もっぱら高校卒業後の若者を対象とする高等教育機関から脱皮し、地域住民の学習需要に応える生涯学習機関としての役割を持つよう強く求められている。多くの大学や大学院は、これまでの公開講座の実施や聴講生制度の充実に加えて、社会人入学制度や科目等履修生制度などを整備して、

こうした社会的要請に応えようとしてきたが、依然として年ごとに漸減する若者世代に大きく依存する構造にはさしたる変化が見られない。そして、かれら若者は、専修学校や短大を含めると同一年齢集団の 8 割近くが高校卒業後に高等教育を受ける状況が生まれた結果、大学で学ぶことに自覚的に向き合い、主体性と責任をもって取り組むことがますますできにくい状況が生まれている。こうした状況において、豊かな人生経験を持ち、さらに知識の獲得に積極的な多数のアクティブシニアが大学キャンパスに参入してくることは、たんに大学経営の安定にとって望ましいだけでなく、次代を担う若者の教育環境という観点からも優れた効果が期待できる。人生経験や職業生活を含め人間の生き方のモデルが近くにあって、かつ同じ学びに取り組む人間として学生と高齢者が机を並べることは、若者の魂の成長にとっても多大な効果が期待できると判断する。

今回の試みが所期の成果を収めれば、日本社会における大学の役割や位置づけの変化を近い将来にもたらす可能性がある。大学が一部の同一年齢層に属する若者の占有物から、自覚的に知識を求めるさまざまな異年齢集団から構成される本来の「知の拠点」に大きく変わるきっかけとして、今回の試みを意味づけたい。本来、高等教育機関としての大学は、年齢によって区切られた人生のある階段において一律に通過する場所ではなく、年齢にかかわらず「知」によって結ばれた「知縁コミュニティ」であるはずである。キャンパスが知のネットワークの結節点として有効に機能することによって、日本における大学のイメージが大きく転換し、大学が本来の知の拠点として再生することが期待される。

いくたびかの苦難の時代をくぐり抜けて今の幸せをつかんだ高齢者こそ、リタイア後の人生を、旅やゲートボールに興じるのみではなく、大学キャンパスを存分に利用し、学生とライフスタイルを共有しながら、これまでの貴重な人生経験を、将来ある若者にメッセージとして伝えてほしい。そこに生まれる世代間の交流が、高齢者の生きがいを向上させるとともに若い学生の精神的成長を促すはずである。そして、このようなさまざまな世代間交流が可能なキャンパスを創り上げることの出来る大学こそ、本来の高等教育機関として、かつまた実体のある生涯学習機関として、21 世紀の「知のネットワーク」( = 知識基盤社会 knowledge-based society ) を主導することができると信じている。

関西大学文学部は、これまでもきわめて積極的に社会連携事業に取り組んできたが、シニア層との連携においても、アクティブシニアを対象とする広範なビジネス分野において幅広いコンサルティング実績を持つ社会開発研究センターとの間で、すでに 2005 年 11 月に、「アクティブシニアに新たな学びの場を創造するために、学術的な研究調査、計画・提言、実施・運営支援等の活動を展開すること」を目的とする連携協力協定を締結し、アクティブシニア向けの教育カリキュラムの開発作業を開始した。そうした準備を踏まえて、今回、株式会社アンクラージュが、日本初の本格的な「カレッジリンク型シニア住宅」事業を計画し運営するに当たり、社会開発研究センターと協力して教育プログラムを入居者に提供することにしたものである。

以 上